

人

フランシス・G・ウィックス夫人

幼年期の内的世界(二)

秋山 達子



前号に引きつづいてフランシス・ウィックス夫人の書かれた『幼年期の内的世界』から、特に幼児の教育に関係のある部分をご紹介しますと思います。ウィックス夫人はC・G・ユングについて心理学を学びましたが、この本の中の一章で、子どもたちのタイプについてユングの理論に彼女の経験を加えて発表しています。タイプの問題は非常に難かしく、一見あるタイプに属しているように見えても、よく観察すると必ずしもそうではない時があります。ここにあげる例はウィックス夫人が彼女

自身で扱った事例についてユングとともによく検討した上で書かれたものですので、ユングの複雑なタイプ論が事例とともによく理解できます。そして子どもたちのタイプを知るとは、診断的な意味よりも、一人一人の子どもをよく知るために重要な問題と思います。

ユングは長い分析の経験から彼の患者がそれぞれ個人的な特徴は持つていて、大別すれば二つのタイプのどちらかに属することを発見しました。それは内向性と外向性の二種類で、ある人の興味がどちらの方向

に向いているかによって区別されるものです。外向性の場合はその人の意識的な興味が外の世界にある対象に向けられていますし、その反対に内向性の場合には意識的な興味が外界の対象から離れて彼自身の心理的な過程、より主観的な世界に向かっています。ウィックス夫人はいろいろな事例を扱っているうちにこのような区別が大きな意味を持つていることに気がつきました。内向性と外向性は一般的な人間の態度に基礎を置くものですが、もちろん誰でもこの両方の態度を多かれ少なかれ持つてい

ものなので、はっきり区別するわけにはいきませんが、しかし多くの場合どちらかの傾向を比較的強く持っているものです。また、子どもたちは両親の影響下にあるので、しばしば両親の希望や意思または無意識的な影響を反映して、彼ら自身の本当のタイプを外に示していないこともありすが、よく観察すれば、本当はどのタイプに属しているかを示す特徴的な反応を見出すことができます。

例えば、はじめて幼稚園や小学校に登校する時に、子どもたちはさまざまの異なる態度を示します。ある子どもは親しげで熱心で新しい環境に大きな興味を示します。彼らにとってはあらゆる対象、先生や他の生徒たちまでも好奇心の的であり、外界に接することにはなんの恐れもなく、すすんでこれをとらえて調べてみようとする熱意に燃えています。これらが外向的な性格の子どもたちの特徴的な反応です。

しかしなかにはこれらの新しい環境におびえて、引き下がろうとする子どももいま

す。外界は彼にとつて絶えざる注意を必要とするところのようであり、不愛想で疑い深く他人と共感を持つことをはねのけようとしているように見えます。彼はあなたに向かつて笑ってみせるかもしれませんが、その笑いは何か遠い感じで、高いお城の窓から遠い景色を眺めてでもいるような、どこか近より難い感じを与えます。このような子どもたちが内向的な性格の特徴を示しているのです。彼らは彼ら自身の内的な世界の中に住んでいて、対象との間に安全な距離を置くか、またはそれを受け入れるとしても一度彼ら自身の心の奥にまで運びこんで、主観的な価値づけをしてからはじめて反応を示すのです。

もちろん子どもたちのタイプはそう簡単にはきめつけるわけにはいきません。引っ込み思案に見える子どもでも、本当は外向的であるのに母親の過保護に甘えて、赤ちゃんでぶっているだけなのかもしれません。または両親の厳しいしつけや兄たちに対する劣等感から小さくなっているのかもしれない

せん。あるいは本当は内向的な子どもなのに両親によって社交性を教え込まれて一見外向的に見えるだけかもしれません。

それでもちょっとしたことからは子どもの本当のタイプを知ることができます。例えば工作の時間に母の日のプレゼントを作ることになるとします。そして思うようにできなくていらだっているので先生がいくら手伝ってあげたとします。ある子どもは作品が上手に仕上がったので喜んで家に持って帰りますが、またある子どもは先生が手伝ったので、それはもう自分の作品ではないといって不満です。外向的な子どもにとってはでき上がった作品が問題になるのですが、内向的な子どもにとっては自分で困難を克服して作るという気持ちに大事なので、この内的な価値こそ母親に贈りたいと思っているものであって、作品自体はどうでもよいのです。

このように先生がたとえどの子どもにも同じことをしたとしても、その反応は決して同じではないのです。外向的な子どもは

環境の変化にも容易に適應しますし、集団行動にもよく参加し、反応も素早く、他人の考えを入れ、友だちも多く、外界の状況を統制したり、指示を与えたりすることができず。皆の意見と大体歩調を合わせ、機智に富み積極的です。これに反して内向的な子どもは万事ゆっくりと行動し、ものごとをまず自分の中にとり入れてそれとよく親しんでからでないと反応を示しません。

このような子どもの知的な能力を計るには注意が必要です。例えば知能検査の場合でも、これに要する時間の問題は、むしろ当人の知的能力よりもタイプの差を示すものかもしれません。このために内向的な子どもは年少期にはよく愚鈍な印象を与えます。また問題に反応する前にそれを自分の中に引き入れて熟考するので、意固地な性格に見えることもあります。現代はどちらかというと外向的な時代ですので、内向的な子どもたちの本当の価値が見失われてしまふ危険があります。これらのタイプの違いは出生や環境によるものではなく、生来

その人に備わっているものようです。同じように育った二人の子どもの間にも大きな差異が見られますし、また教育のある人にもない人にも、そして裕福な人々の間にも貧しい人々の間にも見られます。

子どもたちに接する時には、このようなタイプの違いについてよく注意することは非常に重要なことですし、また自分自身のタイプについても洞察を持って、自分の好みやタイプから子どもたちを誤らして判断することのないようにしなければなりません。例えば学年によってまた先生によって同じ子どもの評価が著しく異なることがあります。ある学年で一人の子どもが非常に興味深い考えを持ち大きな能力と将来性を持っていると言われ、次が次の学年で先生が変わったら、彼は空想的で実際的ではなくものごとの観察に不正確であるといわれました。また反対にある子どもは想像力や独創性に欠けると評価されていましたが、先生が変わると非常に正確でよく反応し注意深いよい生徒であるといわれるよ

うになりました。これらの評価の違いはむしろ子どもへのゆえではなく先生のタイプの違いによるものです。そして一番恐ろしいことは、愛とか子どものためにという美名のもとに、先生や両親が子どものタイプを無視して彼ら自身の夢や希望を押しつけることです。次にあげるような例は世間ではそれほど珍しいものではありません。

第一の例では、父親が本来は内向的な人であったのに家族の要請や経済的な事情から、内向的な人には絶対に必要な一人でいる静かな時間を、次第に奪われてしまったことから問題が起きました。

父親は自分自身の喜びをあきらめて子どもの上にそれを夢みるようになりました。彼はかつて若い時に小さな大学で過ごした静かで幸福だった日々を思い出しながら子どもが生まれると、彼の息子が同じような哲学的な思索に囲まれた古典的な生活ができるようにと計画しました。ところが不幸なことこの子どもは父親とは反対に外向的な性格で、より一般的な科学的実験など

を好みました。息子はもちろん技術的なものを学びましたが、父親は技術面に発達した設備のよい大きな学校を嫌って、古典が尊重されるような小さな学校を無理強いました。息子は反抗してみたものの結局折れて父親のすすめる学校に入りましたが、成績は惨憺たるもので、家庭教師をつけられたりしながらやっと卒業できたような次第でした。

その後で息子は自分の意見の正しさを示すために、もう一度違う学校に入り直して技術的なことを学び、優秀な成績で卒業はしましたが、父親への反抗や最初の大学での苦い経験は、明るく健康なこの青年の性格をすっかり暗くねじまげてしまつて意固地な難しい性格に変えてしまつたのです。

また別の例は内向的な感情型の少女の話ですが、彼女の母親は、アメリカの成功した職業夫人によく見られる自分の職業と自分自身を同一視した結果、非常に積極的で外向的な性格を持っていました。結婚する前は職場でよい地位を持っていて、自分自

身でもまた周囲の人々からもよく役に立つことができる人と思われて満足していました。そして外向性の人によくあるように世間の常識をよく受け入れて行動する性格でしたので、女性の幸福は安定した家庭と子どもを育てることにあると考えて、ちよつとした財産を持つ商売人と結婚し、子どもが生まれると同時に職場を退いて家庭の主婦におさまりました。そしてやはり世間の常識に従つてよい母親になろうと努め、子どものために生きようと決心しました。

彼女の最初の子どもであるこの少女は、生まれながら深い感情を持った弱々しい、しかし、あまり頭の鋭くない子どもでしたが、母親はこの少女のために学問的に高い水準の学校を選びました。

最初はそれですべてよくいっていたのですが、年長になるにつれて母親の希望はますます大きくなり、彼女は学校のいろいろな組織に参加するようにすすめられ、学校劇に出演させられ、多くの派手な友だちを持たせられるようになりました。その間

にも勉強はどんどん進んで難しくなり、特に母親の要求で、社交的な役割も押しつけられている少女の能力では、とても追いつけないところまできました。そこで母親は彼女といっしょに勉強を繰り返すように努めました。これは少女の劣等感を増してただ心理的な混乱を引き起こす結果となつただけでした。

しかし落第点に近い成績も母親にとつては大きな挑戦としか受けとれず、「私がついているからには、この子に失敗はさせられない」という確信を強めただけでした。そして少女が完全に追いつめられて、心理的にまいってしまった時に母親は涙ながらに言ったのです。「これほどこの子を愛し、すべてを捧げつくしてきたのに、どうしてこんなことが私に起こつたのであろう」

この最後の言葉は母親の無意識の考えをあらわすもので、本来は「どうして彼女がこんなになつたのであろう」というかわりに「どうして私に起こつたのであろう」といっているのです。愛と自己犠牲の仮面は

落ちて、そこには利己的な母親自身の野心的な姿があるのみです。幸いなことに少女の無意識が彼女を助けて、この時神経症の症状を訴えはじめました。そして病気であるということがこの誇り高い母親に口実を与えて、少女はやつと完全な環境の変化と、より多い戸外での生活が与えられるようになりしました。しかし、この少女が再び自信をとり戻して、自分自身の生活を始めるまでには長い年月がかかったのです。

ここにあげたものは極端な例ですが、多くの場合両親は子どもの幸福を願いながら、現実には理由のわからない行き違いを感ずることがあります。しかし無意識的な欲望よりも、真の愛と勇気の方が強ければ、両親はやがて子どもを理解するようになり、彼自身の道をすすむように助けることができますのです。そしてただ健康な問題の少ない子どもたちばかりでなく、肉体的や知能的に欠陥を持ったり負い目を背負った子どもたちでさえも、両親や先生たちの理解と指導によって、その子どもなりのタ

イプと能力に従って本当に幸福な生涯を送ることができるのです。

ユングのタイプ論は外向性、内向性の他にも、思考、感情、直観、感覚という四つの機能の区別をあげていますが、ウィックスマ夫人はこれらについても数例をあげて説明してきますので、ここにその幾つかをご紹介しようと思います。

例えば思考型についてですが、学校で優秀な成績をあげるのは通常思考型の子供です。学校は知的なことを習うところですし、思考は現実を知的に解釈する機能です。しかし本当の思考はゆっくりと発達するものであり、記憶力が重要視される年少の学年では思考型の子供も、特に内向的な思考型の子供もあまり認められません。

ある七歳になる少年が科学博物館に行つて長いこと世紀以前の怪獣の骨の前に立っていました。やがて「何千年も前の、人類が生まれてくるまで、その前にはこんなものがいたんだな。そして何千年も後には人間なんかいないで何か違うものがあるん

だろうな。僕たちがつまらないことをしゃべっている間にも神さまは笑っていることだろうな」と夢見るような口調でつぶやきました。この子どもは学校では数の組合せが覚えられなかったり、早く返事ができないので問題になっていたのでありますが、彼の思考力が真価をあらわすのはもっと年長になってからのことでしょう。

また知的な興味をあまり推し進めると子どもの無意識内に抑圧された感情面が爆発して退行的で幼児的な動作をしたり、気ままになったりすることがあります。非常に利発な少女がいましたが、両親も先生もあらゆる機会に彼女の知的な面を開発しようとしていました。そして少女自身も学ぶことが最も好きなのように見えたのですが、次第に加虐的な傾向を持ちはじめ、指をしゃぶったり、爪をかんだりするようになりました。少女は肉体的には健康であったし、母親にどうして彼女がそんなに神経質になったのか理解できませんでしたが、それは彼女自身の野心的な意思が思考面にだけ集中し

たので、他の心理的な機能を抑圧していた結果であったのです。

感情型の子どもは家庭で最もよく能力を発揮します。学校でも、もし思考面での劣等感に邪魔されることがなければよく適応して友だちとの交遊などがじょうずです。

ある九歳になる少女は、学校ではあまりに愚かなので先生を悲しませていました。家庭ではよく気のつく利発な子として母親の誇りでした。またある少女は愛情深い性格でしたが、母親からいつも「私が好きならもつとよい成績をとってみせて下さい」としかられてばかりいたために、感情面のはけ口がなくなつて、悪夢を見たり寝汗をかいたりするようになりました。

最も判断するのに難しいタイプは直観型の子どもです。外向的な直観型の子どもはいろいろなアイデアを持っています。彼ら後までやりとげることがあまりなく、彼らとっては結果より可能性の方が興味があるのです。そして先生が難しい顔をしている時に、呑気な冗談をいってふんい気を柔げ

たり、本を読む時も調子よく、難しい言葉は巧みにはぶいたりします。また内向的な直観型の子どもは、内的な幻想に引き込まれやすく、書き取りの時間に一つの言葉が内的な連想を次々と生んで先生の次の言葉を聞いていません。このような子どもは幻想の世界に住んでいます。それは現実逃避のための幻想ではありません。

ある少女は注意が散漫であるといわれていましたが、よく観察していると、時々目の中に楽しそうな輝きが見られました。そこで後から「さつき数学の時間にどんなすばらしいことを見たの」と聞いてみたら、彼女はある言葉から連想した美しい光景について話してくれました。このような時にそんな幻想はばかばかしいと無視してしまうことは危険です。まずそれを受け入れてあげてから、もつと現実的なことにも気をつけるように注意するべきです。

感覚型の子どもは現実そのものの感覚の中に生きていて、よりよい感覚を与えるものを求めますが、しかしこのような子ども

には都会のあまりにも激しい刺激的な感覚は強すぎて毒になることがあります。

子どもたちは一般に、原始的な民族のようには発達した直観と感覚を持っていきます。特に内向的な感覚型の子どもは、もの形の形の中に不思議なものを見出します。ある時そよ風にゆらいでいる机の上の花を見て「変な小男が手招きをしているから、こわい」と言った子どもがありました。このような子どもは自分の感覚を理解しても、伝えないために、しばしば孤立して劣等感を持ちます。もし私たちがこのようなことはその子どもが変なことを言っているわけではなく、ただある種の性格的なタイプからそのように感ずるのだということを理解して接すれば、子どもたちは安心して心の平和を保つことができるのです。タイプの問題は決して簡単ではありませんが、特に子どもに接する仕事にたずさわる人々にはよく理解していただきたいと思えます。

このようにウィックス夫人はこの章を結んでいます。